

【共生社会の未来像を探求した6日間】

国内外から、たくさんの方にご来場いただき、芸術文化と社会について様々な意見が交わされ、分かち合った6日間でした。今回の国際会議での知見は、今後HPや報告書などのアーカイブにて共有いたします。

講演と4つのセッションでは、国内外の第一人者を招き、文化、居場所、ウェルビーイング、地域、協働、共生といったキーワードを軸に、議論を深めました。

8つの分科会では、国内外の実践事例をきっかけに、議論を深堀りしました。

最終日のクロージングセッションでは、東京大学大学院総合文化研究科の梶谷真司教授が、「今は多くの若い世代が社会貢献や社会課題への関心を持っており、希望を持てる時代である。希望を失わずにゆっくりでも前に進んでいくことが大切」と締めくくりました。



写真左上：東京藝術大学長 日比野克彦さん
右上：東京都庭園美術館館長 妹島和世さん
中央：ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート館長
リサ・フィリップスさん
左下：森美術館館長 片岡真実さん
右下：クラウドウイユ ディレクター デイビッド・デ・キーザーさん

充実した情報保障

全てのプログラムでアクセシビリティサポートを行いました。特に、セッションでは「手話のリレー通訳」として、例えば、登壇者の使用言語が国際手話の場合は、下記のリレーが行われました。

国際手話→日本手話→日本語音声→日本語字幕
↳英語音声→英語字幕



セッションの様子

ろう文化への理解を深めるプログラムも展開

来年秋に開催される「東京2025デフリンピック」を見据え、ろう文化にも焦点を当てました。デイビッド・デ・キーザーさんは、招待講演に加え、リーダーシップ・ワークショップも実施。リーダーの役割やチームビルディングに不可欠な要素などの実践的な知見が共有されました。

参加者からは熱心な質問が続き、終了後もキーザーさんと対話したり記念写真を撮ったりして交流を深めました。



リーダーシップ・ワークショップの様子



また、東京2025デフリンピック公式マスコット「ゆりーと」のモニュメントや、競技を体験できるコーナー、国際手話のほか視覚による情報保障が特徴的なデフリンピックについての展示等を行い、多くの方が理解を深め、体験を楽しみました。

行き交う人たちがアート・対話・最新機器を楽しんだ 《まばたきの葉》 広場 その一部の様子をご紹介します

東京国際フォーラム地下1階のロビーギャラリーには、アーティスト・鈴木康広さんの代表作、《まばたきの葉》が登場！葉に描かれた眼がくるくると回転して舞い降りてくる様子は会期中のランドマークとなり、子供たちや海外からの観光客の注目も集めていました。

ワークショップ、映画上映・トーク、落語会、謎解きゲームなど、「文化と居場所」を表現する多彩な参加型プログラムを連日実施。事前申込みが必要なプログラムはすべて満席となり、立ち見で参加される方々もいました。



《まばたきの葉》 広場



ワークショップ/トーク



空間接続プロダクトによる交流



触れる彫刻の鑑賞



「やさしい日本語」ワークショップ

アクセシビリティを支援する最新機器のコーナーは、家族を介護する方、技術に関心を持った若い人々などの関心を集めました。

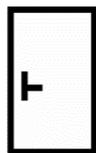
免許不要で歩道を走れる近距離モビリティなど、様々な方々が実際に機器を使用し、その技術に驚いていました。



近距離モビリティの体験



聴覚サポートデバイスの体験



アート/ト

東京芸術文化相談サポートセンター「アートノト」出張相談コーナーでは、芸術文化に関するお悩み・困りごとについて、相談員が様々なご相談にお答えしました。

参加者の声

- 高齢者の方たちと協働制作された編み物作品が素晴らしかった。高齢になると、根気が続かない、ちゃんと完成させられない、などと負い目に感じる人がいるが、それでいいんだよ、とされているような気がした。（50代女性）
- 展示関係の仕事をしている。人にどのように分かりやすく伝えるのかに関心があり、「やさしい日本語」のワークショップに参加して学びを得ることができた。（30代女性）
- 視覚をサポートする機器の技術を初めて知った。自分もあまり目が良くないし、美術館に子どもを連れていくと混んでいたりして作品を近くで観られないことも多くて残念に思っていたのだが、こういう技術で遠くからでもよく見えるようになれば鑑賞の仕方も変わってくるのではないかなと思う。（30代男性）